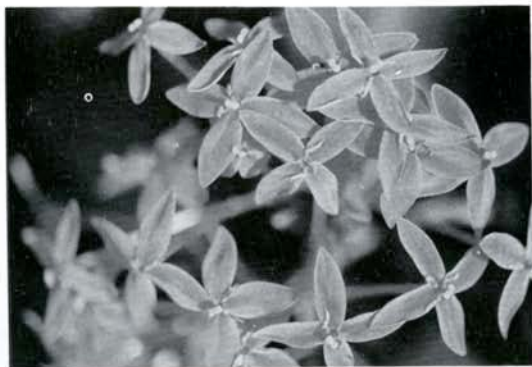


浄土

1993-1

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回発行
昭和二十四年四月二十八日（運輸省特別授承認雑誌） 第三二五号
平成四年十二月二十五日印刷 平成五年一月一日発行
第五十九卷 正月号





正月の秀句

書初や草の庵の紅唐紙

読初や異字なれども歎異鈔

掃初や熊手にかかる松ふぐり

飯田 蛇笏

景山 笥吉

渡辺 水巴

正 月 号



行は一念十念むなしからずと信じて、無間に修すべし。

『つねに仰せられける御詞』

目 次

法 話

善き師とのめぐり合い (1) 八 木 季 生 (2)

新春随想

精進の一年 長谷川 昌 光 (10)

(ひ) (と) (く) (ち) (俳) (話) [14] 初詣 (18)

“維持会員” へのご加入のお願い (9)

季語やぶにらみ (30)

..... 木 下 隆 一 (21)
壬申の年逝く(1)

表紙絵 小林治郎画

法

話

善き師とのめぐり合い (1)



八や木ぎ季き生しょう

(東京・文京区二行院住職)

人間の一生は、何か到達点が決まっいて、その道程を右往左往しているようでもあり、また一面では、全く不規則に、時々刻々その現れかたが変化しているようである。どちらの場合にしても、人生に様々な変化を与えるものは、自分を取り巻く環境から与えられるものが多いが、それらは、自然発生的に起こっているように見えるものの、よくよくその源を尋ねてみると、何等かの要因が縁を引き、更に次の因となり縁となつて変化を与えていくものが大部分である。

釈尊の説かれた縁起の法則は、やはり一切の現象を支配する一大原則であり、人間の一生を決定している最大要因と言わざるを得ないとつくづく思う今日このごろである。

さらに人生の浮き沈み、吉凶、禍福、これらの中でどちらかに糸を引いているその因を尋ねてみると、大きな変化を与えている最大のものは、人との出会いが強く作用していると思う。

人里はなれた山の中で生活しているならいざ知らず、他人の交流が大半を占めている現代人の日常生活では、どんな人とめぐり合い、どんな人と別れていくかが、その人の人生の上に刻々の変化を与えていく要因になっていくことは確かである。

その中でも、特に善き師とのめぐり合い、善き指導者との邂逅は、人生の吉凶、禍福、いや、人生そのものを決定する重要な要素であることに異論はないであろう。

私も人生の四分の三を過ぎて、（これは釈尊や元祖の生涯を標準としてあるが）静に過去を振り返ってみると、人生を大きく決定づけた三つの要因があったと思う。

一つは何と言っても寺に生れたということである。しかし寺に生れても、その後の人生方向の選択は、かなり自由であったのだから、決定的な要因とは言いがたいが、しかし自分の人生の方向づけを大きく舵をとった要因であることに違いない。

二つには、第二次世界大戦が、私の年代の者にとっては、人生を大きく変化させ、方向

づけた要因になっている。

昭和の一身の者には、戦争に参加して、生死に関わる程のことは無かったにしても、戦争による災害を受けたことは差こそあれ、人生の方向づけに影響を及ぼした点を見做すことはできないであろう。

私は寺の三男に生れた人間だったから、兄が戦死していなかったら、恐らく寺の住職をしていなかったであろうし、どのような人生展開になったであろうかと考えると、戦争の影響は計り知れないものがある。

兄が戦死した公報があったのは、戦争が終わって二年も経っていた。その当時の混乱した状況では、生きているか死んでしまったか、特に戦争末期に戦死した私の兄のような場合は、容易に判断し得なかったから無理からぬことではあるが、私は僧侶になる道とはかなり違った医者になるべく歩み出してしまっていた。

兄の戦死が決定的になったことと、その時すでに師僧はかなり高齢であって、持病の糖尿病が悪化していて、即刻寺役を誰かがしなければならぬ状況にあったこと等が重なって、二者択一の決定を迫られる状況となり、方向転換を余儀なくしたのであるが、結局は蛙の子は蛙であったとその時は感じていた。

そして第三の要因になったものは、戦後初めて一宗で布教師養成講座が開講され、それ

に参加したことであつた。

その時から三十年を経過した今となつては、なにがきっかけで養成講座を受講しようと思つたか原因を見出せないが、不思議なことに私の身辺に布教師はいないし、私に布教師になるように薦めた人も、感化を与えた人もいない。

強いて言うならば、私の師僧が布教は大事なことだと言つていたことが耳に残つていた位と思う。私の師僧は、勿論布教師でもなし、布教らしいことをしていたことも記憶に無い。法要の後に、挨拶程度に話をしていたのは知つてゐる。

開設された当初の布教師養成講座は、十一日から二十一日までの三週間であるから、住職で寺を長期にわたつて空けることは難しい状況下にあつた筈なのに、それでも受講しようと思つたのが不思議に思える。

知恩院の古経堂で開講式が終わるとすぐに、その足で愛知県津島の円成寺に行かせられた。この円成寺という寺は、関通上人の開山された名刹で、本尊阿弥陀仏は、関通上人自作の丈六の説法印をした立派な阿弥陀さまである。

東海地方の広々とした田圃の真ん中にある静寂な寺で、老師と通いの老婆が一人いるだけ、着いたその日から炊事、掃除、洗濯、風呂焚き、同行七名だったと記憶しているが、全てを自分たちですることになった。

朝は勤行に始まり、朝食後は老師の選択集の講義、これが昼食をはさんで夕食まで延々と続いた。夕食後は布教の実演、これが一日おきにまわってくる。

講義中に質問はあびせられ、実演中は遠慮無い酷評が与えられ、布教の布の字も知らないで出かけて行った者にとつては、毎日が針の筵に座らされているようだった。

大変に辛い毎日ではあったが、この時指導を受けた林隆碩勸学との出会いは、私のその後の半生の生きかたを変えてしまったと言っても過言でない。

初対面の自己紹介をした時に、今ここに書き列ねたようなことを言ったように覚えているが、それを聞いていた老師は即座に、「そりゃ君、すべて仏縁だよ。医者になろうとした君を、坊さんにしようとして呼び戻した如来さまの計らいだ。ありがたいと思って大いに頑張るんだね」と言われた。

私はその時まで、仏縁という発想が無かった。人生の方向が思いのままにならず戦争によって二転三転し、（私は中学時代、海軍兵学校に入っているから、そのままなら職業軍人になっていた筈である）運命に振り回されているように思っていたのだが、老師の一言はものの見事にこれらを仏縁という言葉で処理してしまったのである。

更に「君の所はまだ本堂ができてないそうだが、そりゃ住職の怠慢だよ。寺の本堂は、中でやることも大事だが、建っていることに意味があるんだ。本堂はそこにあるだけで法

を説いているんだ。布教の勉強もけっこうだが、先ず本堂を建てるのが先決だね。やつてごらん。如来さまがちゃんと建てて下さるから」と、こう付け加えられた。

更にもう一つ、「これから朝の勤行の時に、般若心経を一卷読むようにしなさい。きつと本堂を建てるのに大きな力になるから。般若心経を読んでいると、お寺が繁栄するよ」とも付け加えられた。

善き師とのめぐり合いとはありがたいもので、それまで十数年間出来なかつた本堂が、それから数年後に出来上がっている。爾来般若心経を、朝の勤行には必ず読むようにしている。そのおかげか、本堂が出来てから五年後に客殿が或る篤信者の出現で完成し、数年前に山門も出来て、小さいながら住職一代の責任を果たすことができたことを感謝している。

二年目は、祖山の勢至堂で矢張り三週間、昨年遷化された藤井実應猊下の指導で行われた。二年目だから受講生も倍の人数になっていたが、朝起きるから夜寝るまで、講義を一人でし、食事を共にし、風呂も一緒に入り、体で布教の何たるかを教えられた。

その当時の藤井猊下は、寺を持っておられなかつたから身軽と言つてしまえばそれまでだが、今自分が後進を育てる立場になつて体験してみても、よく長期にわたつて付き添われたいものと感謝を禁じ得ない。

三週間の講習が終わって解散するとき、受講した仲間の一人が、一緒に風呂に入つてまで、起居動作を共にされて指導された記念に、猥下の禪を所望したところ、「いやあ、そればかりはどうも」と、温顔をほころばされた様子が思い出される。

猥下の伝道の信念は、あの長く続いた「はがき伝道」に現れている。私の母に送って頂いていたが、宛名も自筆、そして必ずその人向けのコメントが書き添えてある。読む人の姿を想像しながらお書きになるのであろうが、自分だけに宛てられたその一言がどれほど親近感を増し、お慈悲のあらわれになることか、でもその一言が、数が相手が多いだけにどれほど大変であつたかと想像される。その最終号を大事に保存している。

その後、増上寺のご法主になられてからは、頻繁にお目にかかれたが、知恩院にお出でになられてからは、京都に用事で出かけた時に時間があればお訪ねしていた。祖山においてなられる限りは快くご面接いただけた。

光明会の婦人部長であつた足利千枝女史（祇園精舎に念仏道場を発願し、建立されたが、既に故人となられた）が、猥下と会食をしたいということで、三度ほど京都市内の料亭で七・八名の婦人部員のお方と食事を共にしたが、一緒に同席しているだけで心和む何物かをお持ちであつた。

その温顔にも接することはできなくなって悲しいが、心から報恩謝徳を念じ奉る。

◎“維持会員”へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌「浄土」を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、「浄土」誌は五十九巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、「浄土」誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも「浄土」の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰會

《新春随想》

精進の一年

はせがわ しょうこう
長谷川 昌光

(横浜市光安寺住職)

もういくつ寝ると

お正月

お正月には

風揚げて

こまを回して

遊びましょう

早く来い来い

お正月

この童謡はいつ頃創られたものか存じませんが、師走の日々忙しく働きまわる大人の後姿を見ながら、正月の訪れを待ちわびる子供たちの心情がよく伝わってきます。最近の子供たちもこのように正月の訪れを待っているのでしょうか。

子供の頃を思い起こしてみますと、指折り数えたかどうかはさておいて、これに近い思いで正月の訪れを待っていたように思います。それは、正月になると普段は口にするることのできない白米やお節料理が食べられ、それに「よそ行き」と言って特別に大切にしている一張羅を着て、たこやこまなど新しい遊具を買ってもらい、更に日常の家事の手伝いから

も解放されて、終日遊び過ごすことができたからです。

また私の友人のほとんどは農家でしたので、どの家もいつ訪ねても両親はじめ一家の人たちが朝早くから夕方遅くまで働いていました。それが、正月になると、いつもは忙しく働いているおじさんやおばさんたちが、私たち子供の相手をしてくれたのもうれしいことでした。ややおおげさな言い方をしますと、正月の間は衣・食・住にわたって日常の生活とは違った何かうれしいことが沢山ある特別の期間であったように思います。昭和十年代の後半、戦争中で物資の乏しい時代ではありましたが、身近にうれしき、楽しさを感じる正月でした。

このように正月は普段とは違う日を過ごす

ことによつて、無言のうちに「さあ楽しい正月を過ごした。これから一年間がんばつていこう」と、こうした心の働きがどこかに出来てきたような覚えがありました。

初めにも触れましたが、現代の子供さんたちにも「早く来い来い、お正月」と正月を待ちわびる思いがあるのでしょうか。お年玉を貰う楽しみはいつの時代も変らぬものでありましょうが、四・五十年前と現在とでは生活や経済の状況、価値観等私たちの生活の様相は一変し、着るもの、食べるもの、遊び等々に至るまで一年中が以前の正月のような生活になつてきています。指折り数えて待たずとも日常の生活が、私たちが子供の頃に味わつた正月風になつてきているのです。言うならば正月になつても特別なものは何もないのです。

お節料理はやや特別な部類に入るのかも知れませんが、日頃グルメに慣れた舌には特別な感慨もないわけです。一般に正月を感じるものはテレビの特別番組であつたり、各種のコマーシャルなどであつたり、主としてメディアを通して外部から感じさせられる部分が多く、自分の生活の中に正月を見つけにくく、また感じにくくなつてゐる昨今ではないかと思われまふ。時は移り、時代は變つても、正月の持つてゐる意味合いは、今も昔も變るものではありません。現代の人たちにも良い正月を迎えられるような、何かが欲しいように思います。

炬燵にあたりながらテレビで除夜の鐘を聞

く。やがて映像が切り替わり、アナウンサーがやや改たまった調子で、「新年おめでとうございます」――。

例年これが私の年越しであり、新年の迎え方になっていきます。テレビを見ながらの年越しや新年はまことに無情で能のないことだと思っではいますが、と言って何をしながらこの時を過し、迎えたらいのかその方策も見あたらないのです。次にテレビに映し出される映像は初詣りに向う人たちの長蛇の列であり、混雑した参詣の風景です。私の地元の氏神様も年々初詣りの人が増え、深夜にもかかわらず大変な賑いのようなのです。

良き一年を心に誓い、『天下和順』と神仙に見守っていただきながら一年のスタートをすることは尊いことです。

私たちは個人的にも社会的にもたびたび再スタートの機会を設け、これを契機として生活而建て直し前進していくことが多いのです。正月は主要な年中行事の一つですが、同時に再スタートを心に誓う時でもあります。

私は永年学校での生活をしてきましたが、改めて申すまでもなく学校の新年は四月。新学期には学年が移り、学級の再編成があり、担任が変わり、教室も移動して教師も生徒もまさに人心を一新して新年度に臨むわけです。また直接目に触れることはありませんが、新学年、新学期に寄せる保護者の方々の期待も生徒を通して感じたものです。この時期私は私自身、また生徒一人一人の心の中に起っ

てくる改たまつた氣持、そこから生まれてくる意欲、種々の期待や抱負を如何に持続し、現実のものにしていくかに心を配つたものです。『日々新たななり』という言葉がある通り本来毎日毎日が再スタートであり、毎年毎年が再スタートであるはずですが、振り返ってみると、毎日同じような生活を繰り返しているうちに、いつの間にかマンネリズムに陥つて、情性にまかせた生活に入り込んでしまつていきます。いつの間にか元の氣持、生活に戻つてしまつているのです。こうした繰り返しは、私たち凡愚には避け得ないところです。それだけに社会を挙げて再スタートの機会となる正月の持つ意味合いは大きいものです。

『或は金谷の花をもてあそびて遅々たる春

の日をむなしく暮らし、或は南樓に月をあざけりて漫々たる秋の夜をいたづらに明かす。

或は千里の雲にはせて山のかせぎを捕りて歳を送り、或は万里の波に浮かびて海のいろづくをとりて日を重ね、或は嚴寒に氷をしのぎて世路を渡り、或は妻子眷屬にまとわれて恩愛のきづな切り難し。或は執敵怨類に会いて瞋恚のほむらやむ事なし。惣じてかくのごとくして、昼夜朝暮、行住坐臥、時としてやむ事なし。ただほしきままにあくまで三途八難の業を重ね。しかれば或文には、一人一日の中に八億四千の念あり。念念の中の所作皆是れ三途の業と言へり。かくのごとくして、昨日もいたづらに暮れぬ。今日も又むなしく明けぬ。今いくたびか暮らし幾たびか明かさんとする』

この法語は『勅修御伝』第三十二巻に出てくる「登山状」の一節です。総本山知恩院編の『元祖大師御法語』前編に第二十一として編集されていますので、毎月二十一日の勤行の折に拝読させていただいているものです。

『……しかればある文には一人一日の中に八億四千の念あり、念々の中の所作皆是れ三途の業と言へり。かくのごとくして昨日もいたずらに暮れぬ。今日も又むなしく明けぬ。今いくたびか暮らし幾たびか明さんとする』

元祖様が御指摘された人間の生きざまの一言一言がすべて私の日頃の生活そのものであり、私の存在そのものであるとつくづく感じ

入ります。一方ではたびたびの再スタートの折ごとに、過ぎし日のありさまを改め、明日に向ってたとえ少しでも歩を進めようと心に期することあつても、気がついてみると『念々の所作是れ三途の業』であり、『昨日もいたずらに暮れ、今日も又むなしく明け』ている私です。

私たちは元祖様の御指摘のように知らず知らずのうちに凡愚の生活を重ねているのですが、だからと言ってすべてが駄目であると諦めてしまったのでは、この世に生を受けてきた意味はありません。私たちは自分自身が凡愚の自覚に立った時、はじめて凡愚には凡愚の生き方があると、その生きざまが見えてく

るものです。

天文学的には天体の一周期であるという実体はさておき、一年三百六十五日というひと区切り、そしてそのスタートとなる正月という位置付けは、私たち凡愚を生き返らせる人間の考え出した知恵であろうと思います。自己再生、リフレッシュのよき機会です。更に干支を各年に当てはめ、それぞれに当てられた動物の持つ特性を意味付け、これにあやかつて年ごとに角度を変えて飛躍を期している。これもまた自らを励ましていく方策であろうと思います。

自策自励、平成五年のスタートにあたり、如来様の哀愍護念のもとに心新たな思いを持ち続け、精進の一年でありたいものです。

竹 中 信 常 著

佛心凡情

（ポケット版イラスト入り二四八頁）

佛さまの心で現代の世相を思い、これを凡人のわれわれに分りやすく説いた文集。法話の材料または施本として御利用下さい。

定価五〇〇円 千料二一〇円

《発行・発売》

〒102 東京都千代田区飯田橋一―十一―六

大 道 社

電話（〇三）三三六二―五九四四

振替（東京）一―八二四七

《全国学校図書館協議会選定図書》

ことわざで読む仏教文化の華！

だれもが知っていることわざからの仏教入門の手引

仏教ことわざ辞典

勝崎 裕彦 著

■読みやすい愛蔵版——定価8000円(税込)

A5判・上製クロス装・函入

本文約三〇〇ページ 10ポイント2段組

●挨拶の冒頭、法話の導入部に、文書布教にと、さまざまな活用できる座右の書。

●視力の衰えた中高年の方におすすめします。

■ハンディな携帯版——定価2500円(税込)

四六判・上製カバー装

本文約三〇〇ページ 9ポイント2段組

●日本の伝統文化を知りたい人々に、また寺院から檀信徒への施本に最適。

●一家に一冊、常備の書。

発行 溪水社

〒一〇二 東京都文京区後楽二一八一九
☎〇三(三八一四)九六三一(振)東京七三三六六五

発売 北辰堂

〒一〇二 東京都文京区後楽二一八一九
☎〇三(三八一四)八四九四(振)東京九一四三二四二

初詣

勝崎裕彦

初詣、初参に賑わう全国各地の著名有名な寺社は、年々歳々数多くの参詣人を集めている。もとより有名無名にかかわらず、諸方の神社仏閣への新年のお参りに集う善男善女の願いと思いは、いつの時代でも変わらないものである。

新年という新しい年を迎えて、新春という新しい春を迎えて、福寿を祈り、福德を願うのは、いのちある人として、心ある人として、まことに自然な姿であろう。年老いた人も年若き人も、男性も女性も、初春を迎えて心を

新たにすることは当然である。父や母、夫や妻、兄弟や姉妹の団欒の家族においても、正月元旦の初迎えは、なんとも楽しく、喜ばしいものである。まことに素直な心のあらわれとして、感謝の思いと幸福の願いを込めて神仏に頭を垂れ、手を合わすのである。

元来、初詣には三つの様式があるといわれる。第一は、その年の恵方（吉方・兄方・得方・明の方）、つまりその年の吉に当たる方位方角の寺社にお参りすることで、恵方詣、恵方拝と呼ばれるものである。第二は、寺社のその年の最初の祭日、縁日にお参りすること、初葉師、初閻魔、初観音、初大師、初不動、あるいは初甲子、初卯、初巳、初天神、初庚申などの正月の毎日に欠かせない行事で

もよく見掛ける光景である。

参道の直なる歩み初詣（爽雨）

境内に入りて風なし初詣（王城）

御手洗の杓の柄青し初詣（久女）

星めがけて賽銭投げぬ初詣（青陽人）

吉吉ならず凶凶ならず初みくじ（清三郎）

門を出て星の高さや初詣（浩山人）

初詣の風情を伝える秀句を並べてみると、

その一齣ひとこまごとに、新玉あらたまの年を迎えた人々の気

持ちのほてりというか、心持ちのはずみとい

ったものが、そこはかと聞こえてくるよう

である。なにかもが新しくやってくるよう

く飾られて、しあわせいっぱい、喜びい

いの新年である。

新しと心に期して初詣（裕彦）

ある。第三は、恵方や祭日、縁日にかかわりなく著名な寺社にお参りすることで、新年の初詣の参拝客の多さを競う全国有名寺社の番付は、年賀ニュースの定例項目となっているほどである。

たしかに今日では、著名な寺社に参詣、参拝することが広く行なわれて、年末大晦日の除夜詣から年頭元旦の初詣は、国民的習俗としてレクリエーション化してしまったとする向きもある。しかしそればかりでなく、菩提寺へのお参りや、地域町内の氏神社うじがみしゃへのお参りも相変わらずに広く行なわれていて、それは街角や村里の小堂末祠にも及んでいる。道野辺のお地藏さまや四つ辻の庚申さまへ、通りすがりの人々が心親しく初参を寄せる姿

◇◇◇ 好評の新刊 ◇◇◇

真野龍海 著

『仏の道 やさしい道』

(知恩院浄土宗学研究所シリーズ 2)

◎理屈ではなく、わかる仏教——仏の教えへの導きの書として、さらにお念仏の信仰への教化の糧として、平易なことばでわかりやすく解説。

B 六判・二三四ページ 定価 一三〇〇円

〈出版・発行〉

(株) 東方出版 大阪市北区西天満 三―二―四 電話 (〇六) 三六五―五四二―
振替 (大阪) 四―二〇五二二

* 浄土宗出版室において特価(定価の一割引、一一七〇円)で販売しています。

お申し込みは浄土宗出版室 電話 (〇三) 三四三六―三三五一 まで。

壬申の年逝く(1)

昔から変事の多い年とされている申年、それも壬申の年に関する年表のメモを見ながら、壬申の年生まれの私は、よくもまあ六〇年も生きてきたものよと、つくづく思ってしまう。長いようでもある、短いようでもあった六〇

木きの

下した

隆りゅう

一いち

(随筆家)

年でもあるが、今年はとりわけ壬申の年にふさわしく、国の内外には枚挙にいとまがないほど、実にさまざまな事件が起きた。全く想像を絶するようなことが、次から次へと起こったのである。

先ず第一に挙げなければならないのは、あの強大な力を誇ったソ連邦という大国が、いとも簡単に消滅してしまったことであろう。

もともと、これは正確に言えば去年の暮も押しつまった日の出来事であったが……。このソ連の消滅を思う時、私は一艘の客船を思い出す。去年の一二月半ばから一〇日ほど、高校一年の男の子を伴ってオーストラリアへ家族旅行をした時、シドニーの港で見たソ連の客船がそれであるが、その時は、ソ連の国内情勢がそれほど逼迫しているとは知る由もなかった。

船は世界一周旅行の途中シドニーに寄港したものと思われるが、船上に人影はなく、ただ鎌にハンマーのマークをつけた赤い旗だけが風にはためいていた。

「あの船、母港へ帰ることができかなあ」
何気なくそう言うのと、高校生は無言で船を何枚かカメラに収めてから、

「母港はどこなんでしょうね」と言った。

「さあ、ナホトカかうラジオストックか、そんなところじゃないか」

この子、東京の集合住宅の向かいに住んでいた子で、引越した後も娘のところへ英語の勉強にきているが、幼時から女房が孫のように可愛がっていた。高校受験に際して、「第一志望のところへ入ったら海外旅行に連れて行ってやる」と言った手前、約束を果たすべくオーストラリアへ伴ったのである。

年が明けてしばらくして、出来上がった写真を見せにきた時、高校生が言った。

「ソ連という国、なくなっちゃったんですね。

この船、あれからどうしたでしょう？」

船は、我々が帰国した後、帰るべき母国を失ったのであった。

「あのままシドニーにいるんじゃないか。

まさか船ごと亡命ってこともないだろうが……

……」

私は船上に人影を認めなかったが、一枚の写真に乗組員らしい男が一人、所在なげに写っていた。

「人間の目なんて、当てにならないもんだな」

と苦笑すると、高校生は、

「上のほうに飛行機が写ってるでしょう。

気がつかなかったなあ。シャッター押している時は」

と言つて、笑った。

東西の緊張緩和に尽力したゴルバチョフは追われ、ソ連邦の解体で独立した各共和国は主権争いに明け暮れて、かえって緊張が高まつているのは皮肉な結果だが、これは東欧にも飛び火して、バルカン半島ではいまだに血で血を洗う戦闘が続いている。民族間の確執、宗教上の対立と、以前から紛争の火種はあつても、ソ連の締め付けの厳しい間は発火しなかったが、その箍が切れると一気に火を噴いた感がある。

一方、湾岸戦争で一応の勝利を収めた米国のブッシュ大統領は、一時は九〇パーセント近い支持率を得て、二期目の当選は確実と自他共に認めていたにも拘わらず、経済政策の破綻からあえなく落選、イラクのフセイン大

統領から嘲笑を沿びる始末。あの湾岸戦争は一体何だったのだろうかと考えると、分からないことだらけであるが、私は壬申の年の前哨戦であったという捉え方をしたいと思う。

今年に入っても、世界の各地にキナ臭い匂いが立ちこめ、すでに発火しているところもある。国連の安保理が人道上の見地からという名目で、介入に踏み切ったカンボジアしかし、東アフリカのソマリアしかし。カンボジアへは、日本も遂に憲法を拡大解釈して自衛隊を派遣せざるを得なくなつたし、ソマリアへは一二月に入つて米軍を主力とする多国籍軍が上陸した。インドではヒンズー教徒とイスラム教徒が、国を二分する勢いで争いを続けているし、壬申の年は騒然たるうちに暮れようとしている。

改めて、壬申の年のメモに目を戻す。

我が国の歴史の中で、壬申の年がクロウズアップされたのは、五五二年（皇紀一二二二年）第二九代欽明天皇の一三年で、「百濟聖明王釈迦金銅仏、幡蓋、経論を献ず」という記述があつて、仏教伝来の年として我々は記憶させられている。それ以前の壬申の年とはや神話の世界で、参考にすべき記録はない。以後、今年までに二四回壬申の年を迎えたのであるが、変事の多い年といつても、私のメモには「特になし」と書かれた年がないでもない。但し、これは私の興味の引く記載がないことも含まれているので、あくまでも偏見に満ちたものであることをお断りして書き出してみると、次のようになる。

六一二年、第三三代推古天皇の二一年。特

になし。〔注、三三年後大化改新。〕

六七二年、第三九代弘文天皇一年、第四〇代天武天皇一年。壬申の乱。〔注、乱終結後古代律令制国家への道を歩み始める。〕

七三二年、第四五代聖武天皇の天平四年七月、大伴旅人歿、六七歳。〔大伴家持の父。万葉集を代表する歌人。文人的な風流の作多く、太宰帥として筑紫にある時、山上憶良と親交があった。大納言。〕八月、多治比広成・中臣名代と第九次遣唐使に任命。〔注、出發したかどうか不明。〕

七九二年、第五〇代桓武天皇の延暦十一年八月、山背国紀伊郡深草山（現京都市伏見区北部）での埋葬禁止。〔注、二年後に控えた遷都のための措置であろうか。因みに「日本紀略」によれば、七九四年一〇月、天皇は山

背国宇太の新京に移り、十一月、山背を山城と改め、新京を平安京と号す、とある。〕

八五二年、第五五代文德天皇の仁寿二年八月、京都に大風。一二月、小野篁歿、五一歳。〔注、この人、ある年遣唐副使に任ぜられたが正使藤原常嗣の専横を憎み、病と称して拝命せず。よって隠岐へ配流さる。その時捨て台詞ともとれる歌、「わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよあまのつり舟」を残している。珍しく気骨ある人だったようだ。後に許されて参議になっている。なお、翌仁寿三年、京畿をはじめ全国的に疱瘡が大流行し、多くの死者を出している（「日本文德天皇実録」）。いかなるルートで侵入したのか定かでないが、疱瘡流行の記述はこの後もしばしば出てくる。案外自由に外国と往来してい

たのかも知れない。

九一二年、第六〇代醍醐天皇の延喜一二年二月、藤原忠平らに延喜式編纂の促進を命ず。

〔注〕延喜式Ⅱ平安初期の禁中儀式や制度などを漢文で記したもの。全五〇巻。九〇五年（延喜五年）藤原時平らが勅を受け、時平の歿後、弟忠平がその業を継ぎ、九二七年（延長五年）撰進、九六七年（康徳四年）施行された。発令から施行まで、実に六二年を要しているのはなぜだろうか？

九七二年、第六四代円融天皇の天禄三年九月、空也上人歿、七九歳。〔注〕空也Ⅱ目出未詳。尾張国分寺で出家後、諸国を遍歴、道路、橋梁、灌漑等社会事業を行う傍ら京都を中心に貴賤を問わぬ口称念仏の布教を展開し、市聖（いちのひじり）と呼ばれた。京都東山

に六波羅蜜寺建立。〕

一〇三二年、第六八代後一条天皇の長元五年。特になし。〔注〕翌長元六年一二月、富士山噴火（「日本紀略」）。〕

一〇九二年、第七三代堀河天皇の寛治六年三月、京に大火。八月、諸国に大風・洪水。伊勢両宮の宝殿倒壊す。〔注〕京の大火も台風の記事もそれほど珍しいものではないが、それが壬申の年に起こると、何か特殊なもののように思えてくるから不思議だ。なお、この四年後の永長一年、京中に田楽大流行の記事も見える。当時の田楽が群舞であった以外どんな踊り方をしていたか分からないが、人が群れて踊りに現を抜かすということは、やはり異常といわねばなるまい。現代ならさしづめ世紀末現象と捉えられるところであろう

か。

一一五二年、第七六代近衛天皇の仁平二年九月、京中に淫祠を祭ることを禁止す。〔注、當時は政治は貴族社会の専有物であつて庶民には無縁のものであつたが、政情不安が募れば庶民は心の支えを求めて宗教に走る。新しい宗教が生まれる所以であるが、これは今も昔もあまり変わりが無いような気がする。中にはいかかわしいものが多く、当局の目に余つたのであろう。併記してある「前年より殺傷事件多発、檢非違使に京中の嚴戒を命ず」と考え併せると、世情はかなり荒廢していたと思われる。〕

一二二二年、第八四代順德天皇の建暦二年一月二五日、浄土宗の開祖法然上人入寂、七九歳。二月、延暦寺衆徒、園城寺を焼き討ち

せんとして後鳥羽上皇に阻止さる。〔注、院政いまだ健在なり。〕三月、鴨長明の「方丈記」成る。〔注、鴨長明〓京都賀茂御祖神社（通称下鴨神社）の祢宜長継の子。歌を僧俊恵に学び、一二〇一年（建仁一年）後鳥羽上皇に召され、和歌所の寄人となる。父祖の後を継いで賀茂社の祢宜たらんと欲するも許されず、無常を感じて出家し隱遁。のち日野の外山に方丈の庵を作り、閑居して晩年を送る。〕「方丈記」はこの時の所産で、仏教的厭世觀と共に、悠々自適の趣味生活を活写した中世の随筆文学の傑作である。刊行の前年、長明は鎌倉に下向して、時の將軍源家朝と会っている。「方丈記」の刊行には、実朝の勧めがあつたのかも知れない。一二一六年（建保四年）歿。六三歳。〕

（続く）

◎「浄土」表紙版画絵販売についての案内

「浄土」正月号をここにお届けいたします。

どうか、「浄土」誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の「浄土」誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、「浄土」表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度及び一昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒101 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七

謹賀新年

浄土宗務総長

成田有恒

〒154 世田谷区世田谷四―七―九
大吉寺

埼玉工業大学

松川文豪

鎮西学園理事長

鎮西高等学校校長

真和中・高等学校校長

上田祐規

〒862 熊本市九品寺三十一―一
電話(〇九六)三六四―八―一七六

東山学園

学園長

常任理事

石井俊恭
山崎宏賢
西出澄弘

上宮学園

理事長 小林昭五
学園長 小西祐謙

〒543 大阪府天王寺区上之宮町三一六

上宮太子高等学校長
上宮中学校長 安井良道

〒583 大阪府南河内郡太子町太子

法然上人御降誕地二十五霊場第一番
中国三十三観音特別霊場

誕生寺

〒709 岡山県久米郡久米南町里方八〇八
電話(〇八六七)二八―二一〇二

淑徳高校名誉校長

保元寺住職

里見達人

〒111 東京都台東区橋場一―四―七

教安寺住職

浄土宗議會議員

野呂幸進

〒210 川崎市川崎区小川町六二

大田秀三

〒370 高崎市通町九〇 安国寺
慈光ビル(〇二七三)三―四〇〇〇

浄土宗華陽院

社会福祉法人玉桂会

堀田良謙

堀田卓爾

堀田良爾

〒420 静岡県鷹匠二―二四―一八

新年賀謹

龍泉寺住職	伊東康雄	〒107 東京都港区南青山二八—二五	大本山光明寺執事長 西念寺住職	北邨謙順	〒二五〇—一 南足柄市沼田三一—五 電話 〇四六五(七四)〇五八八	回向院住職	本多義敬	〒130 東京都墨田区両国二八—一〇	雲上寺住職	東海林良雲	〒985 塩釜市南町一一—一
おてらとみなさんの相談所 桜と観音さまのお寺	浄心寺 小池政雄	〒113 文京区向丘二—一七—四	須藤隆仙	鎌倉大仏殿 高德院 住職 佐藤密雄	〒248 鎌倉市長谷四—二—二八 電話 (〇四六七)二—一〇七〇三 FAX (〇四六七)二—一五〇五一	旭蓮社大阿弥陀経寺	山田智旭	〒590 堺市寺地町東四—一—一四 電話 〇七二(三三)六一四〇	大善寺老住	裏辻賢洲	〒811-32 福岡県宗像郡福岡町松原区 三九一四
清岸寺 住職 原口徳正 副住職 原口正弘	松庵寺内無為窟主 小川金英	〒055 花巻市双葉町六—四 仏教福祉センターよるひる銀行	正覚寺住職 楠美知行	〒030 青森市本町一一—二二							

謹賀新年

法然上人二十五霊場 第二番仏生山法然寺 細井俊明 〒761 高松市仏生山町甲三二一五	伝通院住職 吉川哲雄 〒112 東京都文京区小石川三一四一六 電話〇三(三二八)一四(三七〇)一(代表)	圓光寺住職 浄土宗宗議会議員 加藤順底 〒020 盛岡市南大通三一―一四九	北川一有 長寿院 〒111 東京都台東区鳥越二―一三一八
札幌新善光寺 住職 太田眞琴 〒064 札幌市中央区南六条西一丁目	檀王法林寺 だん王子供の家 信ヶ原良文 〒606 京都市左京区川端通三条上ル 法林寺門前町三六	浄運寺住職 野口善雄 〒376 桐生市本町六―三九八	西住院 戸川靈俊 〒606 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松濤弘道 〒328 栃木市万町二二―四 電話(〇二八二)二二―〇八〇二	芳泉寺 柳楽真純 なぎら しんじゅん 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三一七―四八	光明寺 白幡憲佑 〒232 横浜市南区庚台六六(久保山)	宗教法人 悟真寺 代表役員 立松 辨成 電話(〇五三三)五二―五五六六

新年賀謹

〒158 東京都田谷区奥沢七一四一—三 九品仏浄真寺 清水順碩	〒600 京都市下京区寺町通 綾小路下ル中之町五八四—一 浄土宗鎮西流根元地 聖光寺 小林忍戒	晴雲寺 塚田弘導 〒254 平塚市立野町六一五	愚鈍院住職 中村眞道 〒980 仙台市若林区新寺三一二一—七 電話(〇二二)二五六—六〇五七
〒153 東京都目黒区中目黒五一四—五三 祐天寺 住職 本多正雄 副住職 巖谷勝正	大松寺 酒井亮貫 〒108 東京都港区三田四一一—三八 電話(〇三三)三四五一—二四九四	浄土宗宗議会議員 齊藤价洲 〒110 東京都台東区東上野五一—六 宗源寺	お骨仏の寺 一心寺 貫首 高口恭行 〒543 大阪市天王寺区逢阪二一八—六九 電話(〇六)七七—〇四四四(代)
〒162 東京都新宿区西五軒町三一十一 電話(〇三三)二六〇—六七二八 (〇三三)二六九—六八八八 有限会社 小暮製本印刷所	仏教書専門 山喜房仏書林 〒113 東京都文京区本郷五一二八—四	大道社 〒102 東京都千代田区飯田橋 一一十一—六	梅窓院住職 中島真成 〒107 東京都港区南青山二一三六—三八

◎読者の皆様へのお願ひ

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

一、内容 自由 (生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ風におまとめ下さい。)

一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度

一、締切 毎月末日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十九巻 正月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成四年十二月二十五日 印刷

平成五年一月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 南小暮製本印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話〇三(三三二六)二五九四四

千二二(振替)東京八―八二―一八七

新年賀謹

総本山 知恩院	大本山 増上寺 法主 中村康隆	大本山 金戒光明寺 法主 稲岡覚順	大本山 百万遍知恩寺 法主 林 靈 法
大本山 清浄華院 法主 江藤澄賢	大本山 善導寺 法主 藤堂俊章	大本山 光明寺 法主 藤吉慈海	大本山 善光寺大本願 法主 一条智光
〒170 東京都豊島区西果鴨三二二〇一 大正大学 電話〇三三三九一八七三二一代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六 佛教大学 電話〇七五四九一一二四一代表 通信教育部 四九一〇三三九	大乘淑徳学園理事長 淑徳短期大学学長 長谷川良昭 〒174東京都板橋区前野町五十五二 電話〇三三三九二八八三二	京都文教短期大学 学長大河内良孝 〒611 宇治市槇島町千足八〇